

---

# 日常の裏から。

小鳥遊 千雪

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

日常の裏から。

### 【Nコード】

N5282S

### 【作者名】

小鳥遊 千雪

### 【あらすじ】

妹は高校17歳。一方俺は会社員3年目の20歳。別に変わったことなんて無い。何処にでも居る一般家庭だと思っ  
ている。

ただ変わってると言えば…妹の感性は他人とは違って深いというこ  
と。

変わるはずの日常を、俺達は今愛している。

## 家族。

突然で、そしてこれは敢えてなのだが、まず最初に俺の妹を紹介させて欲しい。

まず名前は高城御咲たかしろみさきと言う。

年齢は17の現役高校生で髪は胸にかかる程度。

胸はCカップ、スポーツはほどほどだが本人は「スポーツ自体は好きだけど恵まれていないだけ」と言っている。

趣味はぬいぐるみと仲良くすること。もふもふしたりなででしたり、咄嗟に母性本能が働き出し抱きついたりするのが楽しいらしい。あとは家族と仲良く遊ぶことなのだそうだ。

妹は誰とでも仲良くできるらしく、クラスでは人気者。高校の中で知らない者は少ないらしい。

だが最近アルバイトに興味があるらしく何かと暇になった時にはバイトしたいなあ、と呟いていた。

生憎我が一家、父は大学を卒業してから郵便局の局長、母は自分が働くのが好きだからとパートに出かけている為お小遣いは毎月2000円。

少ないかどうかは他の家を知らないので何も言えないが妹はお金の遣り繰りがとても上手く俺のお金まで詳しく世話してくれたりする。だから正直お金が欲しいとかそういう意味では無い。

多分、社会勉強とか”働く”ということがどんなことを知りたいだけ。

そついう意味では、妹はちょっと特殊かもしれない。

別に脳に異常があるとか精神面がうんたらこんたらうなんて事は無い。

単に、一般人よりその感性が少し違うのだ。

たまに俺もなるほど、と言いたくなることもある。

だが妹はそれに気付いていながら別に気にする様子も無く自分の意見は述べ、周りの意見は全て受け入れている。受け入れ方はこうだ。『考えなんて、人それぞれだよ』

そんなある日、妹が珍しく、真剣そうに化粧をしていた。

「どうしたんだ御咲？お前がお化粧なんて珍しい。彼氏でも出来たかー？」

「うん」

淡々と答える御咲だったが、俺は吃驚した。

こう見えて妹は可愛いと人気がある奴だが彼氏を作ったことは一度も無かったからだ。

「お兄ちゃん、どう？どこか…変？」

正面に向き直り、少し照れくさそうに見つめてくる妹が、何処か別人に見えた。

正直に言うのと、可愛い。こんな彼女が欲しいです。

ああ、これがシスコンか？今までこんな気持ち芽生えたことは無かった。もしかしてついに俺の脳にもシスコンという存在がそこから中を走り出し、そしていつかはそれが当たり前になってしまっただろうか。

「ちよつと、返事くらいしてよね！こっちは…そ、その…真剣に聞いているんだから」

照れているのだろうか、そっぽを向く妹がまた可愛い。

俺もうだめだ。早く何とかしないと。

「あ、えと…に、似合うと思うよ。とても…か、可愛い……」  
「なんだよこれ！愛の告白か！？」

「……そう？…ありがとう。あ、今日お父さんとお母さん仲良く旅行なんだつて。私今からデート行くけど、お昼ご飯はちゃんとテーブルの上にあるから。あと夜ご飯には遅刻するかもしれないけどご飯作ってるからお菓子食べて待ってて」

わかった？と指を指されてしまった。

そして妹はそそくさと玄関へ走り、「いつてきまーす」と明るい声  
で出て行ってしまった。

残された俺は勿論、ゲーム三昧。

妹お手製の昼飯チャーハンを頬張りながら、俺は格闘していた。

何と？今度上司に渡す予定の会社向上案の内容と、気分転換に起動  
させたRPGゲーム。

言い忘れていたが一応自分、高城国治たかしろくにはるは今年で21歳の会社員。  
これでも入社3年目で上司にもさり気なく期待されて入るのだ。

ちなみに今日は土曜日なので仕事もないし快適！明日も自由だ！  
なんて言いたいけどそれ所ではない。

いくらweb広報担当だからといって全員参加の向上案をサボる訳  
にはいかない。

大きなため息を漏らし、チャーハンを頬張る。

くそう、妹の優しい味だけが今の俺の心を癒してくれるぜ……あり  
や？

電子レンジで温めたはずのチャーハンが冷め切っていた。

「ただいまー……ってあれ、お兄ちゃん？おーいつ」

ぺちぺちと頬を叩かれている。

気がする。

ぺちぺち……ぺちぺち……

……気のせいではないらしい。

「ん……おお、妹よ帰ったか……本日の依頼はだな……」

「そのギャグ今週全部言った。もう飽きた。ご飯作ったから食べ  
よ」

俺が起きたのを確認したからもう用済み、という感じでエプロンを  
脱ぎながら部屋を去っていく妹。

何だよ、寂しいじゃないか。……まあ、ずっと同じギャグを使い続け  
た俺も悪いか。

大きく伸びをして、目の前の机を見ると、大変なものが目に入った。シャープペンシルで書かれた「会社向上案」、紛れも無く、俺の字。問題なのはそこではなく、「向上」周辺が薄い黄色いシミがついている。

向上の左隣に書いてある文字が読めない。

「こ、これは…俺の涎か！？やや、やつちまった…！ここなんて書いたっけ…うおー！！！！」

あまりの悲しみ（精神的ダメージは案外大きいんだ）に俺はつい叫んだ

「お兄ちゃんうるさい！！早く降りてきて！！」

ら予想通り怒られた。まあ、そうだよな、普通。

仕方なく階段を下りる。

若干テンションが下がり気味だったが、リビングに入るなり物凄く良いにおいがした。

ポトフ、日本人の神・米、サラダ、そしてメインであるデミグラスソースのハンバーグ…！！

「こっ、これは…！！」

「きよ、今日はいつもお兄ちゃんに遊んでもらってたのにそれが出来なかったからせめてこれで時間取り戻せたらなあーって……」

何処か落ち込み気味に話す妹。

別にデートが上手くいかなかった訳じゃなくて、単に家族と過ごす大事な時間を取れなかったのが苦しかったんだろうなと俺は気付いた。

妹はそういう奴だ。

昔から、家族を宝物のように大事にしようとする。

俺は箸でハンバーグを切り、一口頬張る。

妹の優しい味がまた俺の舌を、心を癒す。

「どう？」

「ん、御味はいつも料理が上手いなあ。相変わらず美味しいよ」

「そっか、よかった」

とても嬉しそうに微笑む妹。  
俺の心に少し、輝が入った。

## 家族。(後書き)

高城御咲：家族を愛してやまない高校2年生。好きなものはぬいぐるみ。

小さい頃から父親と母親が居なかった為家事にかなり強い。

小学生中盤の時点で大体の料理レシピは覚えていた。  
誰からも好かれる性格で、明るい少女。

高城国治：御咲の兄で会社員。

小さい頃から妹と仲が良く、学校が違ってても妹を学校まで送ってから自分も登校をする程。

よくノートと間違えられる。友達はパソコン。



## それぞれの価値観。

突然だが、前にも話したとおり妹は家族を愛している。

一方、俺は家族を愛することが出来なかった。

正直妹が何故家族という存在を愛することが出来るのか理解できない。そういう意味では俺も変わっているのだろうか、とたまに思う。

理由なら一応、ある。

単に俺が両親の期待を裏切って生まれてきただけなのだが。

”男”というのがいけなかったらしい。

おかげで生まれてきた時から愛情をくれた覚えが無いように思う。

多分、妹が生まれてから俺は孤独だった。

両親は妹だけに愛情を注ぎ……そう、まるで俺の存在を忘れている感じ。

だから、多分家族を愛せないのだ。好きになれない。考えただけで反吐が出る。

一方妹は両親に気に入られていたが、それをあまり嬉しそうにはしなかった。

寝たふりをして親が寝るとすぐに俺の部屋に来た。

ただ何もせず、勉強して本を読んでる俺の隣にいた。

多分妹の中では俺も家族の一人だったんだと思う。

そして何気なく、幼稚園の頃から小学校の頃までは一緒に登下校をしていた。

そんなある日、妹が両親と喧嘩をしたらしい。

妹は外へ飛び出し町を徘徊していた。

そして俺を見つけた瞬間に道路に飛び出し、交通事故が起こった。幸い危険を感じた俺は妹をかばったのだがそのおかげで重傷を負った。

病院に1ヶ月入院。

妹はかすり傷だったが一緒に同じ病院へ。  
それでも両親は妹ばかりで俺の病室の場所すら聞こうとしなかったから、妹はそれにキレて……その二日後には妹も同じ病室で俺の顔を見てにこにこしていた。

「あれ、あの二人は？」

「今日も旅行」

昔から両親はそれぞれの道を歩んでいた。  
もともとバラバラの家族だった。  
今は、もう粉々になって破片すら見えない。

「ねえ、お兄ちゃん」

ぼーっとしてたら妹に話しかけられた。

「ん、どうした？」

「昔から好きなこととして自由にしてた私達の両親ってさ、なんであまり家に居なかったのか知ってる？」

妹の質問に頭が痛くなる。

家族の話題なんて、あまり聞きたくないし、話したくも無い。

「御咲の親父は仕事にかまけて毎日毎日残業が好きだから。その妻はいつまでも乙女ぶって色んな男とデートしてたから。それでも御咲の事は好きだったみたいだからあれでも早く帰ってきてた方だと思っよ。ま、俺達が退院してからあの二人も目が覚めたらしいけど。」

……変な意味で」

めんどくさくなって、つい、ため息が出る。

妹はどうでも良さそうにふうん、と呟いた。

本当は、どうでも良くないんだらうけど。

「どうしたんだ、いきなりそんな事聞いて」

「……いや、単に彼氏の家は仲良さそうだって……」

「は？家に上がったの？」

妹の言葉に俺は驚いた。

まさかそこまで進展していたとは思ってなかったから。

「いや、完全ではないけど玄関までは」

「そ、そうか……」

少し、シヨックだな……。俺なんて恋も無ければ女性の家に上がり込むとか……いや、無理無理。

あの二人は時間が合えば旅行ばかりしている。

まあ、育児放棄させたのは交通事故時に妹をかばって大怪我した俺なんだけど。

妹がキレてからそんな生活ばかりになった。

お金は箆笥に隠してあるお金を俺が黙って拝借。

そしてそれを俺が、「親から」と伝えて妹に渡している。

そうでない、何も出来ないから。

家族ってそういうもんだと思う。他の家庭は多分違うんだろうけど。

家族は、嫌いだ。愛情とか、信じるものじゃ無い。

気付けばミーン、ミーンとうるさい音が聞こえた。

そして夏が来たのだと実感する。

会社の昼休みなのでスーツの上着ボタンを外しネクタイを緩め外に出る。

今日は妹お手製の弁当が無いから、外食のつもり。

「あれ、お兄ちゃん？」

聞き覚えのある声に、俺は振り向いた。

そこには妹と……

「んあ……？アンタ誰……」

眉間に皺を寄せ、嫌そうな目付きで俺を見る学生服の男……。

「あ、あの……」

「御咲さ、こんなヤツと知り合いなの？お前は俺の彼女なんだから俺だけのこと考えてろっ」

話そうとした妹に、男は一方的な怒りをぶつけている。

そして、パーンと軽快で重たい音が響いた。

「　っ！」

殴られた頬を押さえる妹。

一瞬で俺の視界がシャットアウトした。

「おら、行くぞ！」

「あ、…あとで…ね…っ」

妹の腕を引っ張り俺の後ろを通ってく。

妹の悲痛な声が聞こえた気がした。

それぞれの価値観。(後書き)

高城御咲：親から愛されながらもそれを拒んでいた少女。

どこをどうしてそれが家族愛に繋がったのかは謎。

高城国治：親から愛されず孤独に育った兄。

それが彼の当たり前であり、一般的ではないとは気付いていない。

男：御咲の彼氏。

## 変化の瞬間

夜、会社から帰って。

俺は真つ先に御咲の部屋に向かった。

いつもはするノックをせず、部屋に入ると、ベッドの上でボロボロに泣いている御咲を見つけた。

「……っ」

正直、泣いてるとは思っていなかった。

せいぜい、ぬいぐるみを抱いて落ち込んでいる程度だと思っていた。

「あ……、あの……お兄……ちゃ……」

真つ赤に泣き腫らした顔をぬいぐるみで隠すように、隠れ切れていないにも拘らずぬいぐるみの陰に身を潜めるように、震える声押し殺すように、妹は俺を呼ぶ。

「……」

返事が、出来ない。

「あの……今日は……ごめ……」

「……もう、二度とあんな奴の側に寄るな」

苦しそうにしている妹の姿に、俺の脳内がふつつつと煮え滾る様な感覚がしている事に気付く。

「あ……あの、ね……」

「近づくなつて言ってるんだ、返事出来ないのか？」

そんな感情に任せて冷たい物を投げつけるように、言葉が勝手に飛び出す。

俺の言葉に妹が更に震えるのが見て分かった。

それでも、俺の怒りが治まらない。

「……っ……」

「どうなんだ？近づかないっていう約束は出来る？出来ない？」

「……っ……」

「約束が出来ないなら、この家には二度と帰ってこるな」

自分が妹を虐めている気がした。  
自分の中から生まれ、膨れ上がる苛立ちが治まらなくて、居所が悪くなる。

それだけを言い残して、俺は家を出た。

「……くそっ！」

俺を加速させる苛立ちを吹き飛ばしたい衝動に駆られた。

つい、目の前にある電柱を殴った。

右手にピリピリと、痛みという名の電流が走った。

夏の夜にしては少し肌寒い。

スーツを着崩しているせいだろうか。

今からどうしようか？

癒えには暫く帰りたくない。

街をうろつく気分ではない。

会社には戻れない。

でもどうせなら、仕事をして気分を発散させたいかもしれない。

なんて色々考えていたら、太ももの辺りで振動を感じた。

携帯が鳴っているのだと気付き、手に取ると『新着メール1件』の

文字があった。

開き、メールの確認をする。

ディスプレイの光が眼に痛い。

『久しぶり。久しぶりに帰ってきたし会いたくなっただけ、今

大丈夫か？』

高校の頃の友達からのメールだった。

どうせ行く場もない。会ってみるか。

『おう、行く。何処だ？』

とだけ返信を打って、俺は歩き出した。

「おー、治ちか久しぶりー」

聞き覚えのある声があった。

集まったのは街にあるファミレス。にぎやかだし、気分も晴れるか

もしれない。

「久しぶり。お前変わったな。あんなに目立つ緑頭だったのに……」  
「染めてたのは茶色だよっ！」

目の前の旧友、夏目祐史なつめ ゆうじの元気そうな声に少し安心した。  
昔は特に縁があつたわけでもなく、気付いたら居た。

会話内容や関係としては、漫才師に近いかもしれない。

ただ、祐史は頭が軽くイツて俺の名前が呼べないからと国治の『治』の字をおさむ、と呼ぶ」

「気付いたら居たの辺りから聞こえてるんですけど!？」

馬鹿ですみませんねえ、と先に席を着きドリンクバーを利用していったようだ。

グラスに入ったコーヒーをストローでブクブクさせていた。

「それ、行儀に悪いんだぜ？」

「うつせえやい」

ぶー垂れる祐史。

「それ、デブになるんだぜ？」

「マジで!？」

驚き、青ざめる祐史に俺は腹が痛くなった。

やっぱ、こういう気分ときは楽しい奴と馬鹿騒ぎしたい。

「嘘に決まってるんだろ。……くくっ」

元気そうな姿と昔と変わらない姿に後から後から笑いがこみ上げる。

「アンタ最低だな相変わらずっ!……で？」

「ぶぶっ……あ?…ふぶっ」

「アンタ笑いすぎだよ!…あーもう話が進まん。いや、予想より早く来たから驚いただけだよ……」

通路に体を向けて足を組み、横目で俺を見る祐史。

「いや、別に。見て分かん?俺会社帰り」

「会社ここだっけ?家と反対側じゃなかった?」

祐史の言葉に俺は納得してしまった。

そういえば、そうだ。



気付けば俺は嘘をついていた。

「あ？そうだっけ？ま、気にすんな」

今の状態を隠しておきたい気持ちと突然の面倒くささが俺を操る。

「喧嘩でもした？もしかして御咲ちゃんの事とか？」

ニヤニヤ顔で俺を見る。

くそ、なんでこいつは昔から勘が鋭いんだ。

何度か、嫌なことがあれば俺は祐史で遊んでいた。

だがその度にこいつはその原因を直ぐに当てた。苛めの様な奴だ。

まさかそれが、今も変わらないとは…。

「うるさい、気にすんなつってんだろ」

また気分が悪くなってきた。

「はいはい、じゃあ話せるくらいになったら良いよ。何か珍しく内容が重たそうだから」

ふう、とため息をつき無くなったコーヒーを入れにドリンクバーへ立ち去る祐史。

俺の肺からも、重たいため息が漏れた。

その時、再び携帯が震えた。

「ったく…今度は何だよ…」

帰ってきた苛立ちに、俺は苛立つ。

携帯を開くと、会社の後輩からの電話だった。

俺は急いで立ち上がり、店を出る。

祐史にはすれ違いざまに「電話出てくる」と伝えた。

初夏でも寒いものは寒い。

スーツのボタンを俺は締めながら電話に出た。

「もしもし、高城です」

『あ、高城先輩？夜分遅くにごめんなさい、仲江です…。今、大丈夫ですか…？』

おどおどと緊張しているような声が聞こえる。

「うん、それは知ってる。今も大丈夫。どうかした？」

早く本題に入りたい俺はまた少し苛立ちを覚えた。

「わ、私今残業中なんですけど…高城先輩が作ってくれたリストで不備があつて…わ、私じゃ直せないんです…」

「え、マジ!？」

苛立ちが瞬時に焦りに変わった。

多分、昼に苛立ったせいで仕事が疎かになつたんだ。

「は、はい…だからその、明日朝一で出勤して欲しいなと思って…。それで直してくれれば私も終わるから…」

「あ、いや…今すぐ行く。会社まだ入れるよね？」

俺はすぐ会社の方面へ走り出した。

「え?わ、私も居るし警備員さんも来てる時間なので大丈夫ですけど…」

「じゃあ待つてて、今走つて向かうから」

「え、待つ」

彼女が言いかけたところで、俺は電話を切つた。

よくよく考えたら走つても30分は余裕でかかる。タクシーを捕まえよう。

丁度、道路を見たら空車のタクシーが通り過ぎようとしていた。

俺は手を上げ、タクシーに近寄り半ば強引に止める。

乗り込んで行き先を告げ、祐史には「仕事。1時間以内に帰る」とだけメールして。

俺は会社へ急ぐ。

## 変化の瞬間（後書き）

高城御咲：国治の妹。

高城国治：御咲の彼氏が気に入らない。高校の頃は祐史で遊んでいた。

男：御咲の彼氏。

夏目裕治：国治を「おさむ」と呼ぶ旧友。

成績は低い方で、今は実家のある田舎で働きながら社宅住まい。

仲江　　：国治の会社の後輩。少し引っ込み思案。

## 合わない歯車

「あ、せ、先輩！？お、お疲れ様です…。予想より早く来てくださって吃驚しちゃいました…」

オフィスに入って早々。

相変わらずおどおどした動きで微笑む仲江さん。

「あ…いえ、迷惑をかけたのは俺の方ですから…」

「あ、コーヒー入れてきますね」

にこりと微笑み、仲江さんはそそくさと給湯室へ消えていった。

なかえきょうか  
仲江響歌さん。

年数的には去年の夏に入ってきて1年目となる後輩だが、実は25歳とその性格と見た目以上に大人の女性だったりする。

まあ、見た目と言っても眼鏡でゆるい三つ編みのおさげ髪で身長がほしい150ほどだと高校生に見えるなあーとかいう俺目線・俺イメージな訳だが。

ちなみに以前の会社では秘書をやっていたらしい。

人とは見かけによらないものだ。

「お待たせいたしました。どうぞ」

とりあえずデスクに座り、パソコンを立ち上げたところで

仲江さんが微笑みながらコーヒーを置いてくれた。

音を立てずにコーヒーを置く辺りや、その淹れてくれたインスタントなコーヒーがやけに美味しい辺り、これは秘書のスキルかもしれない。

「お、おいしいツスね、このコーヒー…」

正直、ずっと飲んで居たい位の美味さだった。

「ただのインスタントですよ？あ、でも高城先輩の大体の好みにあわせてあります。確か、角砂糖1個とミルク1.5個でしたよね？」

「えっ、あ…そうだけど…。よく知ってるね…」

「皆さんの分もちゃんと覚えていますよ？」

なんとという洞察力。まさかこれが秘書の力……か？

「秘書のとき、一番最初に教わったのがコーヒーやお茶の淹れ方だったんです。色々なお客様がいらっしやいますから、その方々一人の好みを熟知し、提供すること。付き添いする方の補佐はもちろん、お客様に持て成す事も秘書の仕事であると、その時先輩に教わったものですから……。もはやこれは癖ですね」

ふわりと微笑む姿がなんとも愛らしい。  
いや、俺何言ってるんだ。

その時、携帯が震えた。

どうやらメールのようで、祐史が『お仕事まーだー？』なんて書いてある。

そういえば、すっかりさっぱりと忘れていた。

「ご、ごめん。友達待たせてるからさっさと作業を終わらせて帰らせてもらおうよ！」

流石に待たせつきりそのまま別れるのは失礼だよな、折角愛に来てくれたんだから。

自分の最高速度でキーボードを軽いタッチで叩く。

どうやら今は調子が良いようでいつもより3倍は早くなってる気がする。

赤くはなっていないので多分そんな気がするだけ、本当に。

それから20分ほど経った頃、ようやく作業を終えた。

目が痛くなり、右手で目頭を押さえた。

「あ、ありがとうございます。…えと、大丈夫ですか？」

右側から仲江さんの声が聞こえ、振り向くと心配そうな表情でこちらを見ていた。

その時の俺の目は何か変だった。仲江さんが天使に見える。

……無えな。

「ああ、大丈夫です。それじゃあこれ、そっちに転送しておくんで、終わったら帰りますね」

「はい、ありがとうございます。早く帰って、妹さんと仲良くやつ

てて下さいね」

にこりと微笑む仲江さん。

だが俺の心はほのぼのとゆっくり出来なかった。

「うーっす、ただいま」

またタクシーを使って結局店に帰ってきた。

俺は手を上げ、祐史に帰ってきた事をアピールする。

「おー、おかえりー…って違う！おい、どういうことだ！！」

帰ってきた返事が想像より少し違った。

祐史が焦っているように見える。

「あ？どうしたよ。落ち着けて。とりあえず腹減ったから飯」

俺は椅子に座り、メニューを取り出した。

お、タラコの和風パスタ美味そう。でもゴツソリカツカレーも美味  
そうだな…。

「お前こそ何落ち着いてんだよ！それでも兄貴かよ！！」

「…あ？」

机をバン！と大きな音を立てて勢いよく祐史が立ち上がる。

周囲にひんやりとした空気が漂った。

まるで時間が止まったかのように。

それもそうだ。さっきまで賑やかだった店内が祐史の音で動きが止  
まったんだから。

他方向から視線を感じた。

祐史の顔は、苛立っている。

それから数秒して、周囲がいつもの賑やかさに戻った。

祐史は立ったまま、口を開く。

「お前、さ…本当にそれで良いわけ？昔から”家族なんて信じるものじゃないだろ”とかさ、”あそこに俺の居場所があって堪るか”  
なんて言ってたけどさ…本当にそれで良いのかよ？そのままにして  
て良いのかよ…！！」

その声はまるで悲痛な声。

実際にコイツは痛んでるんだ、きつと。どこかが。

「俺は嫌だ……もし、本当に俺があの子の兄なら……家族に空気のような扱いを受けても、あの子が存在を変えてくれたのなら、ただの恩返しかもしれないけど助けてやりたいって思うよ……！誰だってそんなもんだろ……あんたは違うのかよお！？」

祐史の腕が俺の胸倉を掴む。凄い力が加わってるのが分かる。でも祐史が何について言ってるのか、俺は分からないでいた。どうやら、話が飛んでいる。

これは……そうだ、俺が会社に行ってる間にここで何かあったんだ。そうに違いない。

「お前さ、なんで何も言わないんだよ……。なるほど、お前にとって家族なんて”まだ”そんな物か。じゃあ良いよ、俺は既に一度嫌われてるけど使えないお前の為に俺が行ってやるよ。最ッ低な奴だな、お前って」

そのまま投げ飛ばされるように放り捨てられた俺の体。

祐史はカバンも持たず、そのまま店を出て行く。

とりあえず俺はスーツを着なおし、ベルを鳴らした。

「はい、ご注文ですか？」

「すみません、タラコの和風パスタとゴツソリカツカレーお願いします」

「はい、かしこまりました。少々お待ちくださいませ」

## 過去の錯覚

「お待たせいたしました、タラコの和風パスタとゴツソリカツカレーです。ご注文は以上でよろしいでしょうか？」

「はい」

「ごゆっくりどうぞ、失礼いたします」

注文した飯をテーブルに置き、定番文句を述べて去っていく店員。既にドリンクバーからレモンソーダを持ってきた俺はそれを一口飲み、まずカツカレーから手を付けた。

口に入れようとしたその時、何処か近くのテーブルで会話をしている女性二人の会話が偶然、耳に入った。

「DVってやつー？あゆみったらそれで別れちゃったんだよ」

「え、そうだったの！？そっういえばDVで思い出したんだけど、さつき凄かったねー。結構回りに迷惑感漂ってたけど」

「殴られた女の子痛そうだったけどかなり申し訳無さそうだったねー。アタシあんな彼氏絶対イヤ。っていうか有り得なくなーい？」

「何であんなことしたくなるのかね。男ってホントわかんない」

何故そんな言葉が耳に入ったのか分からないが、俺は気にせず飯を食べる。

「よく考えたらあの殴られた女の子って柏木高校の制服じゃない？着崩してた上にカーディガン羽織ってたからちよつと分かりにくいけど」

「えー！？あそこ名門じゃん！優等生かあー、アタシ無理無理。よくあんなのと付き合えるよねー……」

「本当にね。制服の襟の色を見る限り2年生のはずだよ」

「マジ？ってかエリカ詳しいねー。何で知ってんの？」

「へへー、仲良しの従妹が柏木の2年生なんだよねー。でもあの子見たことあるんだよなあ……。名前なんだっけ。たか……高峰……？うん、忘れた！」



俺の手が、止まった。

何も考えず、気付けば俺は注文表が書かれた紙とお金をレジに置いて、店を出ていた。

何となく直感で、大きな道路を渡り、駅の方へ走っていた。

『もし、本当に俺があの子の兄なら…家族に空気のような扱いを受けても、あの子が存在を変えてくれたのなら、ただの恩返しかもしれないけど助けてやりたいって思うよ…！』

何故か祐史に先ほど怒鳴られ言われた言葉が頭の中で再生される。

長い階段を上り終えると、駅の前の広場でいつもと違う光景が広がっていた。

男の上に、祐史が跨って、顔を殴って、それを見ながら大泣きする少女。

そしてそれを止めようとする、警官。

どうして、こんな光景が広がっているのか分からない。

大泣きする少女に、眼鏡をかけたおさげ髪の女性が話しかけ、優しく抱擁して。

警官に捉まって無理矢理立たされる祐史。

殴られ続けた男はもう一人いた警官の手に？まり立ち上がって、ゆつくりと少女の元へ歩き出す。

そして女性を突き飛ばし、少女を立たせ、彼女の頬に男の拳がめり込んだ。

俺は衝動的に、警官よりも早く男に掴み寄って男を殴った。

一人の警官は俺と押さえ、もう一人は男を連れてその場を立ち去っていく。

その場に残された四人は皆静かで、たった一人だけ、警官は電話をしていた。

”俺”の意識が戻ったのは病院だった。

あの後警官が呼んだ救急車に皆乗り込み、少女は診察を受け、祐史はガーゼや絆創膏を張ってもらい、女性は俺を含む三人の付き添い

をしていた。

「落ち着きました？現場に着てから魂が抜けたようになっていましたよ？」

目の前で優しく、仲江さんが微笑んでいた。

ああ、あの女性はやっぱり仲江さんだったんだ。

「…その、私も吃驚しました。会社から駅に向かっていたら、広場で男性があの子を殴ったから…。それからすぐに、あの男の方がやってくる…」

俺の隣に座って、仲江さんは話を続ける。

「でも、高峰先輩は来ると思っていましたよ？お兄さんだもの」「にこりと仲江さんが微笑む。

「兄だからと言って…妹の元へ行かなくてはならないんでしょうか…」

「寧ろ、兄弟だからこそ、行くんだと私は思いますよ？」

仲江さんの言葉に、少しは考える。

だけど、やっぱりそういう気持ちは分からない。

「…：わかりません…」

「こいつはそういう奴です。その…先ほどは助かりました、ありがとうございました…」

診察室から出てきた祐史が仲江さんの前で頭を下げる。

「いえ、打撲で済んで良かったです。えと…貴方は先輩と仲良しなんですか？」

「いや…まあ高校からの馴染みですけど…コイツは家庭の事情で家族が信じられず、家族の意味も知らない大馬鹿者ですよ。そういう話は何話しても全然通らないから諦めた方が良い」

無言で、俺を見てくる仲江さんに、俺は少し苛立った。

「何ですか…」

「そういえば治、御咲ちゃんは全治6ヶ月だった。良かったね、生きてて。お前がそんなんじゃないや無ければきつと、いや…絶対小さな怪我だけで済んだのにな。あとで謝っておけよ、全部。それじゃ俺帰

るんで」

「あ……………」

軽く、手をヒラヒラさせて祐史は病院を去っていく。  
仲江さんはその姿が無くなるまで見つめていた。

「……………」

重い沈黙がやってきた。

ただ仲江さんは直ぐに俺の手を取り、

「行きましよう。御咲さん、待ってます」

強引に俺を、妹の元へ案内した。

仲江さんがコンコン、と軽いノックを鳴らすと、中から「どうぞ」という声が聞こえた。

「失礼します。…えと…御咲、さん…。体は大丈夫ですか？すごく痛かったですよね…」

グツタリとベッドに横たわる御咲に話しかける。

御咲はゆっくりと目を開けて、明るく微笑んでいた。

「いえ……………こんなの、大丈夫……………。それよりも…ありがとう、ございました…。その…兄まで、見てくれて…」

「大丈夫、先輩は会社の方で私の方がお世話になってますから。その…御咲さんが良ければ、これからお見舞いに来ても良いですか？ね、先輩。一緒に反省会とお勉強会をしましょう」

「……………は？仲江さん何言ってる……………」

この人、目がマジだ。本気すぎる。

「えと…家族が、来て…くれると…すごく嬉しいです…。これから…も…よろしく、お願いします…」

妹はにこにここと返事をしていた。

俺は、この空間が分からない。

気持ち悪い。

吐き気が出そうだ。

「という事で……その、いきなりだし良く分からない空気かもしれませんが……私と付き合ってください。出来れば、家族と言つ意味で」

## 過去の錯覚（後書き）

多分もう2、3話で話終わる予定でう。この展開意味分からん！と思っただけかと思いきや、実験的に書いてる話なので気にしないでいただければ幸いです…！（ノ、）

## 異世界のような真世界

困った。

頭が痛い、本当に。

何故？どうして？

訳が分からない。

マジで、どうしてこうなった。

先生、気付けば俺はリア充になっていました。

え、何？仲江さんと妹は実は知り合いだったとか？

それとも兄（一応俺）の世界に対するイメージをがらりと変えようとかいうテレビ企画？

カメラさんも音声さんも照明さんすら何処にも居ないって。

「そもそも高峰先輩は家族に対してのイメージが余裕でおかしいです。何でそんなに自信が無いんですか？会社ではあんなに自信で満ち溢れてるのに」

今、何て言われた？

「高峰先輩、いつも妹さんお手製のお弁当嬉しいのに食べてるし、家族関係とか凄く良いんだろ？なあって思ってたよ…」

仲江さんが、かなりしょぼーんとしている。

しかしその言葉は俺の中ではかなり耳障りで、聞くだけで奈落の底へと落とすくらいに殺傷能力が高かった。

「あ、あの…？」

「高峰先輩にお願いがあります。いくらご両親から嫌われていたとはいえ、今の貴方が居るのは妹さんのおかげなんです。だから、せめて妹さんだけで良いから、家族を愛してあげてください。愛情とが理解できなくても、元気かなー、とか何してるか心配だなー、とかでも良いんです。これ以上妹さんを苦しませたらダメですっ！」  
あの仲江さんが会社でも、普通の会話でも、それ以上に話していることに驚く。

そして、何故俺はお願いをされているんだろう。頭の整理が付かない。

「えっと…先輩？その…返事くらい……」

「あの、すみません」

突如、仲江さんの言葉がさえぎられた。

声のした背後を振り向くと、図体の大きい大男がいて、なんか手帳を掲げられている。

なんというか、『この紋所が目に入らぬかーっ！』って感じに。どう見ても警察手帳です本当にありがとうございました。

「私、刑事課の奄美あまみです。貴方は高城さんのお兄さんですよ？妹さんのことで話を……」

「え、え？」

また新たな問題の予感。

「あのっ…！私、仲江と申します。…その、その話にも混ぜてください」

「いやいや、これは家族のお話ですので……」

ダメ、と言う風に手をふる刑事に対し、仲江さんは胸に手を当てて立ち上がった。

「いえ…その…私も家族ですっ！しょ、将来ですけど…！」

何言ってるんだこの人！

「……とりあえず彼は現行犯逮捕、暴行罪で起訴する予定です」

何だろう、この空気。

病院の休憩室でする会話じゃない。

ソファアの中央にどすつと大柄かつ大胆に座る奄美刑事と、会社と同じように足を斜めにセクシーで大人っぽく座る仲江さん、そして何故小さく丸まって座る俺。

そして刑事さんのおごりでそれぞれの手にはミックスジュース（紙パック）が握られている。

その持ち方まで个性的だがそこまで話すのは正直面倒。

つてか何故俺はこんな説明をせねばなるまい。

「あ、大島？一応メモっておけよ？」

「あ、はいっ…！」

眼鏡をかけた見た目クールビューティがあたふたとメモの準備をしている。

まだ慣れてないのか、あるいは緊張してるとか？よく分からない。とりあえずこの奄美刑事のパートナーではあるようだ。

「それで話っているのはね？彼、実は前に何度か補導してまして、少年院自体も一度行ってるんです」

「そ、そうなんですか…」

あれ、その台詞って本来俺言うべきじゃない？

と思っただら仲江さんにキッと睨まれた。

あれ、怒られてる？

「それでね、彼女と彼がどれほど付き合っていたのか、とかその間に似たようなこととかあるかなと思って聞きにきたんですよ。お兄さん、わかる？」

「えっと…そう、ですね…。彼氏が居ると聞いたのは春で…4月終わりから5月にかけてだった気がします…。な、殴られたところは一度…ッ!？」

とりあえず俺が答えると、脇腹に痛みと言つ名の衝撃がきた。

なんという肘鉄…仲江さんパネエです…。

「ふうむ、そうか…。殴られた痕とかは見ないのかい？」

刑事さん、今の見えてないの？

「み、見ては無い…ですね…」

ヤバイ、本気で痛い。

「奄美さん、…。。…どうしますか？」

「ん？そうか。じゃあそつちへ急ごう」

大島さんが奄美刑事に耳打ちをし、先に姿を消していく。

奄美刑事は帽子を被りなおし、出る用意をした。

「じゃあ私も忙しいのでそろそろ行くよ。また話を聞かせてくれ。



では」

「あ、はい……」「ありがとうございます」

奄美刑事の別れに俺と仲江さんの声が重なる。

そして。

「高峰先輩がこんなに家族に無関心だとは思わなかったです……なんか私、先輩に対してのイメージ崩れちゃいました……」  
落胆された。

多分そこは夢の中だ。

まるで水の中に投げ出されたように体が重く、そして妙な浮遊感がある。

だが、苦しくない。

「国治……国治……」

声が聞こえた。女性の声だ。

優しく、どこか覚えのあるような、そんな声。

だがそんないつまでも聞きたい声が、突如豹変した。

「家族と言うのは切っても切れない縁だと思えます。もしその存在が嫌いになっても……貴方はその存在を大切にしなければなら……」

……それが、今の貴方を助ける存在なら尚更……」

これはきつと悪魔の囁きだ。

拒否してしまいたい。

耳を塞いでしまいたい。

「現実から逃げてはいけない……。自分は嫌われて良い存在なのだと、認めてはいけない……。自分という存在は、愛を知らない、愛を信じられない、と決め付けてはいけない……。いつまでも、過去に縋ってはいけない……」

その声が、怖い。気持ち悪い。

脳内に入ってくるその声が、吐き気を催すほどに、多分俺は涙を流した。

きつと自分の意識の何処かにあるパンドラの箱が、今開かれようと

しているんだ。

「…目を覚まして。家族を、信じてあげて。過去の記憶を、思い出して…」

そして、海の中から引き上げられた。

大量の水を飲み込んでしまったかのように、突然喉が苦しくなり、俺は大量に咳き込んだ。

そして咳のし過ぎで酸欠を起こす。

どうしよう、盛大に苦しい。

こういう時は……そうだ、深呼吸だ。

大きく息を吸い、それをゆっくりと吐き出す。

たった一度だが心拍もかなり落ち着いたようで、何気にドキドク、とるさかつた心臓が今は違和感などほとんどない。

落ち着いたことを実感し、俺は今の時刻が気になり携帯を手に取りうとした。

が、見当たらない。

そもそもここは何処だ？

見渡すとまるで見たことの無い部屋のような気もするが、見たことがある気もする。

どうも落ち着いているはずなのに、まだどこか落ち着いていない……というか意識がはつきりしていない気がする。

とりあえず俺はベッドから立ち上がった。

すると、足元で何かが落ちたようでその衝撃と音が響いた。

そこに目をやると、軽く探していた携帯を発見した。

「お、ラッキー。今何時だろ……」

携帯を開くと時刻はまだ夜中の3時半。

だがそれよりも気になったのは、『新着メール1件』の文字だった。メールを開き、内容を確認する。

差出人は、妹。

内容は……「なんだよ……これ……」

どうしてこうなった？

今だけ外出を許された、車椅子姿で入院中の妹と、肩を並べて。

一番最前列には知らない人間達の中に埋まる仲江さんの姿。

全員が黒い服を着て、気味が悪い。

相変わらず状況を飲み込むという作業は俺のスペックじゃダメなようだ。

妹の言葉も、奄美刑事の言葉も受け付けられない。

吐き気ばかりが俺を襲う。

そんなに俺にアタックしたいならいっそ、俺の友達になってくれと言いたいくらいだ。

勿論、却下だが。

『国治さん、大丈夫ですか…？』

頭の中に先ほどの出来事がフラッシュバックを始めた。

『まさか旅行先でこんな事故が起こるとは…。妹さんのこともあるが…なんと声をかければ良いか…。…… なんていうか、申し訳ない』  
奄美刑事と仲江さんの姿が出てきてはまた訳の分からないことを喋る。

「お兄ちゃん大丈夫…？ 顔色、かなり悪いみたいだけど…。本当に家族、二人になっちゃったね…。一応仲江さんがいるから3人か」  
拳句の果てには妹まで何を…。

「……え？」

「…？ 聞こえなかった…？ やっぱりかなり体調悪いでしょ。顔、青いよ…？」

心配そうな妹が、車椅子から身を乗り出すくらいに俺の顔をまじまじと見てくる。

「ん、いや…。大丈夫…。まだ、実感無いなというか…ボーっとするとうるか…。何があつたんだろうなと思って」

「もう…。やっぱり体調悪いんだ…。でも仕方ないよね。お父さんもお母さんも、あんな遺書を残して死んじゃうなんて酷いよね…。お土産まで準備して…持ってた通帳全部遺書と一緒に置いておくし

…」

朝、メールを確認して俺は家を飛び出し病院へかけこんだ。

病室に行くと、妹はテレビと書類のようなものと4冊ほどの通帳を広げ、それらを交互に見比べていた。

「あ、お兄ちゃん……」

「これって……」

「うん、お父さんとお母さんが準備してた遺書と通帳。お金全部くれるって。あとお兄ちゃんにごめんねって言ってたよ？とりあえず、これ」

そう言っただけ渡されたのはたった3行だけ書かれた手紙だった。

所々滲んではいるが、『死にます。こんな親でごめんね。国治も、本当にごめん』ただそれだけ。

「なんだよ、これ……」

「お兄ちゃん、裏裏」

「……？……なんだこれっ」

妹に言われて手紙をひっくり返すと逆に文字びっしりに沢山の言葉が書きなぐられていて、なんか蠢いてるみたいに見えて気持ち悪い。読むのもめんどくさいくらいに、びっしりと書かれた手書きの文面。「そっちが本当にお母さんが書いた文だよ。私の知らないこと一杯書いてあったから吃驚しちゃった」

「そりゃ吃驚もするよ……な……」

読んでいて、俺が思い出していた妹が生まれる前の話。

母親と一緒に過ごした毎日とか、楽しいこと、辛かったこと、かけてくれた色んな言葉。

「現実から逃げてはいけない……。自分は嫌われて良い存在なのだと、認めてはいけない……。自分という存在は、愛を知らない、愛を信じられない、と決め付けてはいけない……。いつまでも、過去に縋ってはいけない……」

気持ち悪くなるようなその言葉が、逆に気持ちを落ち着かせるこの

訳の分からなさ。

なんでこんなことになったのだろうか、とため息が出る。

自分で何が起こっているかわかってないのにこんな気持ち、誰もきつと分らないだろうな……。

どうすれば、分かってくれるだろうか。

「お兄ちゃん、どうしたの？お通夜、終わったよ」

「あ？ああ……ちょっと、ボーっとしてた……」

気が付けば妹に頭を撫でられていた。

「大丈夫ですか？何かずつと青ざめていましたけど……」

そこへ、仲江さんがかけてくる。

「仲江さん……、大丈夫です。心配してくれてありがとう」

「本当に大丈夫ですか？何か様子が……」

「いや、大丈夫ですつ、本当に……」

覗き込んでくる仲江さんの顔に、俺は立ち上がって否定する。

なぜかって……なんか恥ずかしい気がしたからだ。

「なら良いですけど……。あ、ちょっと出てきますね……」

納得してはいないだろうが、仲江さんは一度頷くと会場を去っていった。

「……なあ御咲、どうして俺は親が嫌いだったんだ？」

「……？私は私が生まれたから私ばかり世話してて、お兄ちゃんのこと放っておいてたからだと思ってたけど……？」

「……じゃあ何で俺は今まで小学校も、中学校も、高校どころか会社も入社できて、こうやって生活してるんだ……？」

「それは……」

俺の問いに、御咲は少しだけ言葉を詰まらせた。

「それは、実はお母さんが影でお兄ちゃんを支えてたから、とか……？」

「……俺って、そんなに親不孝者？」

「……気付いてなかったなら、そうかもしれないね」

「……母さんが俺を陰で支えてた理由ってなんだろう？」

「お父さんが本当に私を好きだったから、優しいお母さんは私だけ  
を愛するなんてきつと出来なかったんじゃない？」

「御咲はずつと知ってたのか？」

「たまにお兄ちゃんの話があつたからそれが当たりなら知ってた」  
「酷い妹だな」

「でも自信は無かつたよ。お兄ちゃんのことを好きなのか嫌いな  
のかわからないような言い方だったし。でも……」

「でも？」

「お兄ちゃんがお母さんのお金を盗んだって、お兄ちゃんが勝手に  
毎月のお小遣いを2000円に決めたって何も言わなかつたけど、  
その度私にご飯を頼む時は『お兄ちゃんの料理に嫌いなもの入れて  
あげて』って言ってたし、愛情が無かつたわけでも無いと思うよ？」  
妹の言われた言葉に、俺は過去の記憶を思い出す。

ピーマン・牛すじ・茄子・鰹節・納豆・佃煮……

「……あれって、母さんの仕業？」

「実はね。お母さんなりの仕返しだったんじゃないかな……。嫌わ  
れてるんだから近づきにくかつたとかだつたりして。何をするにも  
考えなんて、人それぞれだよな？」

久しぶりに聞いたようなその一言。

「……そうだな、考えなんて人それぞれだな」

ああ、思い出した。

確かにそんな人だった。

嫌なことをされたら、さり気なく仕返しをする人だった。

でも小さかつたから、それすらちよつと俺は楽しんでた……気がする。  
なんか、俺って最低な人間だな。

どうして、誰かが死んでから理解するんだろう。

「……お兄ちゃん、泣いてる？」

「気のせいだ」

「貰つたお金、どうする？」

「まず御咲の医療費に使う。それで俺達の生活費にする」

「仲江さんの分も残さないかね」

「そうだな。彼女にプレゼントって何が良い？」

「いっそ指輪あげちゃえば？」

「まだ1ヶ月も経ってないのに？」

「大丈夫だよ、仲江さん良い人だもん。あんなお姉ちゃん、私にプレゼントして欲しいな」

「どうしてそういう恥ずかしい事を軽々とお前は……」

優しい風が吹いた気がした。

誰かがそこに居る気がした。

優しく見守られてる気がした。

俺は今から改心できるだろうか。

「お兄ちゃん！いい加減日常の表に帰ってこよう！」

「は？」

「怪我してない私とか、生きてるお母さんとか、私は今までと変わらない生活がしたいな」

「一度起こった事は無理だろ……」

「そんな事無いよ、今なら、戻れる気がしない？私知ってる日常に、”戻ろう”」



そして、海の中から引き上げられた。(後書き)

初めまして、投稿はお久しぶりです。

あまりに間が空いてしまったため筆が止まり、無理矢理話を終わらせてしまいました。

予定していた結末も180度変わってしまいました。

なんか、終わらない気がしたので…。

なんなら新しく書き直すのかなーとか考えてます。

正直、駄作になってしまつてさり気なくシヨンボリしてます…。

いつもの勢いが出れなくて困りましたねー。本来なら8話ほどで終わる予定だったのに><

なんというか読者の皆様に申し訳ない…OTL

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5282s/>

---

日常の裏から。

2011年5月27日12時25分発行